

華容道の関羽と張遼

小 松 建 男

I はじめに

『三国志演義』の関羽と張遼は、友人である。二人は、関羽が曹操のもとに身を寄せていた一時期を除けば、常に敵味方に分かれて戦う間柄であるにもかかわらず、不思議な友情で結ばれている。張遼以外に、敵の將軍でこのような扱いをされたものはいない。しかも二人が最後に顔を合わせるのは、華容道の場面である。華容道は、魯迅も指摘しているように『三国志演義』のなかでもすぐれた場面の一つである⁽¹⁾。『三国志演義』の作者は、なぜここを関羽と張遼の最後の出会いの場面にしたのであろうか、また二人の関係によって我々に何を伝えようとしているのであろうか。以下、まず華容道の場面について詳しく分析し、ついで平話や元曲の張遼との比較を行い、『三国志演義』が、二人の最後の対面の場として華容道をえらんだことの意味を考えてみたい。

II 華容道

関羽と張遼が関わりを持つ時期は、三つに分けることができる。一つは張遼がまだ呂布配下の將軍であった時期。関羽は、張遼を一廉の人物と認め、呂布が曹操に破れて処刑され、張遼も呂布と同じ運命をたどろうとするとき劉備とともに助命を願う。次に関羽が曹操の攻撃にあって劉備たちとはぐれ孤立した時期。この時張遼は、曹操の使者として関羽の前に現れ、ここは一時曹操のものに身を寄せて、劉備たちがどうなったのかははっきり分かるまで死なぬようにと説得する。関羽が曹操のもとに身を寄せた後も、張遼は関羽と曹操の間を周旋する。そして最後が華容道である。

a 張遼登場まで

華容道における関羽の登場と、彼が曹操を見逃す経緯を、嘉靖本⁽²⁾では次のように記述している (10,62a-63a)。

- 1 言未畢、一声砲響、両辺五百校刀手擺列、当中関雲長提青竜刀、跨赤兔馬、截住去路。操軍見了、亡魂喪胆、面面相覷、皆不能言。操在人叢中曰、「既到此処、只得決一死戦。」衆將曰、「人縱然不怯、馬力乏矣、戦則必死。」程昱曰、「某知雲長傲上而不忍下、欺強而不凌弱。人有患難、必須救之、仁義播於天下。況丞相旧日有恩在彼処、何不親自告之、必此難矣。」

操従其説、即縦馬向前、欠身与雲長曰、「將軍別来無恙。」雲長亦欠身答曰、「関某奉軍師將令、等候丞相多時。」操曰、「曹操兵敗勢危、到此無路、望將軍以昔日之言為重。」雲長曰、「昔日関某雖蒙丞相厚恩、某曾解白馬之危以報之。今日奉命、豈敢為私乎。」操曰、「五関斬將之時、還能記否。古之人大丈夫処世、必以信義為重。將軍深明春秋、豈不知庾公之斯追子濯孺子之事乎。」雲長聞之、低首良久不語。當時曹操引這件事、説猶未了⁽³⁾、雲長是個義重如山之人、又見曹君⁽⁴⁾惶惶皆欲垂。雲長思起五関斬將放他之恩、如何不動心。于是把馬頭勒回、与衆軍曰、「四散擺開。」這個分明是放曹操的意。操見雲長勒馬、便乘空和衆將一齊衝將過去。

雲長回身時、前面衆將已自護吳操過去了。雲長大喝一声、衆皆下馬、哭拜於地。雲長不忍殺之。正猶豫中、張遼縦馬至、雲長見了、亦動故旧之心、長歎一声、並皆放之。

曹操は赤壁において劉備・孫權の連合軍に敗れ、追撃してくる軍勢に幾たびも苦しめられながら、華容道までたどりつく。するとその前に立ちはだかったのが関羽である。曹操は、程昱の、関羽の人柄からしてかつての恩義を持ち出せば見逃してくれるであろうとの助言（「某知雲長傲上而不忍下、欺強而不凌弱、人有患難、必須救之、仁義播於天下。況丞相旧日有恩在彼処、何不親自告之。必脱此難矣某」）に従い関羽に見逃してくれるように頼む。関羽の心は、討ち滅ぼすべき敵である曹操と、かつて恩義を受けた曹操の間で揺れている。

これよりさき諸葛孔明は、曹操に恩義のあることを理由に、この追撃戦から関羽をはずそうとした。しかし関羽は「軍師好心多。当初曹操委是重待某、某已殺顔良・文醜、解白馬之困、已報訖。今日撞見、豈容放免。」(10,48a)と答え起請文までしたためてこの場に臨んだのである。華容道でも、助命を願う曹操に、すでに恩は返したとひとたびは拒絶する。しかし曹操に、関羽が五つの関所で部將を切ったにもかかわらず、見逃したではないかと指摘されると、しばらく逡巡したあと（「低首良久不語」）道を空けさせる。これは、逃がすと明言しないとはいえ、語り手も言うように明らかに見逃そうとするものである。しかし、曹操が逃げ去ろうとするのを見ると、また攻撃しようとする（「大喝

一声」)。ところが、敗残の兵が平伏するのを見ると殺す気になれない。彼が見逃すべきか攻撃すべきか迷っているところに、おりしも張遼が一人遅れて登場する。関羽は彼との友情を思うと（「動故旧之心」）歎息し、ついに全員を見逃してしまう。

b 華容道以前

華容道の場面は、曹操が赤壁で劉備・孫権連合軍に敗れ、その追撃を逃れながら華容道へとたどり着くまでの描写と大きく異なっている。華容道までは、逃げる曹操軍に対して、劉備・孫権配下の将軍（呂蒙・凌統・甘寧・趙雲・張飛）たちが入れ替わり立ち替わり攻撃を仕掛け、曹操配下の将軍（張遼・徐晃・張郃・許褚）が応戦しながら逃れると言う描写が繰り返される。その記述は典型的であるが、同じことの繰り返しともいえるが、それがかえって追われている切迫感をよく伝えている（10,55a-59a）。ここでは張遼も曹操側の将軍の一人として登場している。

呂蒙と凌統の場合は次のように描かれている。

- 2 正走之間、背後一軍趕到、大叫、「曹賊休走。」火光中現出呂蒙旗号。操催軍馬向前、留張遼断後、敵呂蒙。前面火把從山峪擁出。一軍擺開、大叫、「凌統在此。」前後掩殺。曹操肝胆皆裂。忽刺斜裏一彪軍到、大叫、「丞相休慌。徐晃在此。」彼此混戰一場、一路望北而走。

甘寧の場合は次のようになっている。

- 3 行不到十里、喊声起、一彪軍出。馬延問之、那員將大呼曰、「吾乃東吳甘興霸也。」言未畢一、刀斬馬延於馬下。

続いて趙雲が追撃する場面は以下のようにになっている。

- 4 半腰裏一彪軍殺出、衆軍皆叫、「趙子龍在此等候多時。」操教徐晃、張郃双攻趙雲、自己冒煙突火而去。

最後に張飛が追撃する箇所は次のように描かれている。

- 5 正未猶了、前軍後軍一斉発喊。操皆棄甲上馬。多有不及时收馬者。四下火煙布合、山口一軍擺開、為首者乃燕人張益德也。横矛立馬、大叫、「操賊下馬受縛。」諸軍衆將見了張飛、尽皆胆落。許褚騎無鞍馬來戰張飛。張遼、徐晃二將、縱馬也來夾攻。兩辺軍馬混戰做一團。操乘空走過、諸將各自脱身。

これらの追撃戦において、将軍たちは、めまぐるしく入れ替わってひたすら戦い続ける。そこにはためらいも悩みも存在しない。ところが華容道に至ると、

これらの将軍たちは動きをやめ背景に退き、関羽と曹操のみに焦点が絞られる。追撃戦の時の緊迫感を感じていた読者は、一転してまるで二人のみがこの場において静かに会話をしているかのような印象すら受ける場面へと導かれる。

華容道に現れた関羽は、例 1-5 に登場する将軍たちのように疑うことを知らず、ひたすら戦い続ける人物ではない。彼は、曹操をその官職によって「丞相」と呼び、自らについては謙称（「関某」）を用いている。このような相手の地位を考えた呼び方は、礼儀にかなった冷静で理性的な振る舞いであり、追撃戦の諸将の殺気だった雰囲気がない。

本来曹操は、今の関羽にとって敵であるので、張飛のように「操賊」というか、または「曹操」というべきところである。既に引用したように、関羽も孔明に対しての台詞では「曹操」と言っている。従って、ここで関羽があえて「丞相」と呼んだのは、明らかに、曹操を敵として見ることができず、恩義ある相手として敬意をもって向かい合っていることを示している。追撃する張飛らは、曹操の軍勢を敵とみなし戦うことに何の疑いももたない。応戦する徐晃らも迷うことなくひたすら戦い続けている。ただ関羽のみが曹操を敵と思い切れない。その関羽の苦悩が、この「丞相」と口を開くところによく示されている。

c 遅れてくる張遼

華容道の場面は、このように関羽と曹操に焦点を絞っているのです、その場にははずの将軍たちは皆「衆将」と一括されて名前が出てこない。ところが、この関羽と曹操の関係に焦点を絞ったはずの場面に、華容道までの戦いでは諸将の一人という扱いであった張遼が、なぜかここでは他の諸将のように背景に押しやられることなく最後に登場する⁽⁶⁾。しかも彼の顔を見たことが、見逃すべきか否か逡巡していた関羽に「長嘆」し全員を見逃すという最終的な決断をさせている。ここで関羽は、敗軍の将となった張遼の顔を見て、曹操を前にしたときと似た迷い、敵将として戦うべきか友人として見逃すべきかに苦しんでいる。毛宗崗は「動故旧之情」（嘉靖本は「動故旧之心」）の後に、「張遼無言、関公亦無言、都妙在不言处写」（p.566）と評をつけ両者無言の中に見所があることを指摘している。

そもそも張遼を華容道に登場させたのは、『三国志演義』独自の設定である。『三国志平話』⁽⁶⁾の華容道に相当する場面は次のようなものであった（47b）。

6 曹公尋華容路去行、無二十里、見五百校刀手、関将攔住。曹相用美言告雲

長、「看操与亭侯有恩。」関公曰、「軍師嚴令。」曹公撞陣。卻說話間、面生塵霧、使曹公得脱。関公趕数里、復回。

東行無十五里、見玄德。軍師、「是走了曹賊、非関公之失也。」言使人不着玄德。衆問、「為何。」武侯曰、「関将仁徳之人、往日蒙曹相恩、其此而脱矣」関公聞言、忿然上馬「告主公復追之。」玄德曰、「吾弟性匪石、寧奈不倦」軍師言、「諸葛去、万無失一。」

この記述を見ると、この場面を構成する基本的要素は、張遼を除けばこの段階で既にそろっている。関羽が「五百校刀手」（関羽配下の兵は、『三国志演義』においても、よくこのように称される。一種の定型句と思われる。このことについては別に論じたい）を引き連れ行く手を遮ったこと、曹操がかつての恩義に免じて見逃してほしいと頼むこと、曹操が逃げおおせたこと、いずれも『三国志演義』に継承されている。また関羽が曹操を逃してしまったのは、土埃（「塵霧」）が立ったせいとされているが、曹操に恩義を感じる故に関羽が彼を逃がしたのではないかという見方すら諸葛孔明の発言の中に既に見えている（但し関羽の行動がこれを否定しているといえる）。唯一欠けているのは張遼である。

『三国志演義』における張遼の特別扱いは、華容道の危機をのりきった後にも続いて見られる。辛くも脱出に成功した曹操は、南郡近くで救援に来た曹仁の軍勢とであうことになるが、ここでも曹操に付き従っていた將軍たちは、「首将」と一括され名前を挙げていない。ただ張遼のみが、華容道の時と同じく曹操に遅れて到着し「雲長之徳」について発言している（10,63b-64a）。

7 曹操既脱華容之難、（中略）操曰、「幾与汝不相見也。」接入南郡。隨後張遼也到、言雲長之徳。陸統敗兵皆随首将帰南郡。

これらの例を見れば、作者が、華容道における張遼を、その記述はわずかであるが、曹操とともに重要な意味を持つ人物と位置づけていたことは明らかである。

III 百計張遼

しかし、張遼が関羽の友人だというのは『三国志演義』ではじめて見られる設定で、平話や元曲に見える張遼は、曹操側の知将であって、関羽との間には敵味方の関係しか存在していない。

元曲⁷⁾を見ると張遼は許褚と併称されることが多い。まず元刊本である『元刊雜劇三十種』では、「関大王单刀会雜劇」第一折（1-76）に「高声叫、陰

殺許褚張遼」、また「諸葛亮博望燒屯雜劇」第二折（6-40）⁸⁾に、「那裏怕他曹操下張遼許褚」とある。明代のテキストでは「莽張飛大鬧石榴園」第二折（7-629）に「我着那許褚張遼一命亡」、「関雲長千里独行」（6-729）に「險些兇驚殺許褚、荒殺曹公、殺張遼」とある。また「莽張飛大鬧石榴園」第二折（7-629）の「他那里有九牛許褚夏侯惇百計張遼」のように、「百計張遼・九牛許褚」と修飾語付で併称されている例も見られる。

おそらく「百計張遼」と「九牛許褚」は既に定型化した表現であったと思われる、それぞれ単独でも使われている。たとえば『脈望館抄本古今雜劇』所収の「諸葛亮博望燒屯雜劇」第二折（6-9）では、曹操の台詞に「我手下有一員上将、乃是百計張遼」とあり、「関雲長千里独行」（6-726）では、許褚が自ら「某九牛許褚是也」と名乗っている。

このような定型句の存在は、曹操配下の将軍を、知恵者の張遼、力自慢の許褚によって代表させるという考えを背後にもつと思われる。次に引用するのは「劉玄德醉走黃鶴樓」第三折（5-223）に見える劉備の台詞であるが、そのような発想がよく現れている。

8 曹操以雄兵百万、虎将千員。左有百計張遼、右有九牛許褚、独霸許、虎視中原。豈不謂之好漢。

また張遼については、自ら知将を以て任ずる台詞も存在する。「関雲長千里独行」（6-707）では、彼自ら六韜三略を読み、曹操の参謀だと言っている。

9 幼習儒業、頗看韜略之書。先曾在呂布之下為健将、後在於曹丞相手下為参謀。

また『脈望館抄本古今雜劇』所収の「諸葛亮博望燒屯雜劇」第二折（6-9）でも、「自習兵甲之書、深曉軍陣之法」と兵法に通じていることを誇っている。

但し『元刊雜劇三十種』の「諸葛亮博望燒屯雜劇」には、「自習兵甲之書、深曉軍陣之法」に該当する台詞がない。「百計張遼」も「九牛許褚」も元刊本には見られないので、この定型句が元代からあったと言ってよいのか、あるいは明代になって形成されたものと見るべきなのかは、まだ慎重な検討が必要であろう。

同じく元刊本である『三国志平話』にも「百計張遼」と言う言い方は出てこない。但し「智囊先生張遼」という表現がある（32a）。

10 曹相共衆官商議、有智囊先生張遼曰、「先使軍兵於霸陵橋兩勢埋伏。如関公至、丞相執盞与関公吳路。関公但下馬、用九牛許褚将関公執之。如不下馬、丞相贈十様錦袍。関公必下馬謝袍、九牛許褚可以執之。

これは、劉備と離れてしまいやむなく曹操のもとに身を寄せていた関羽が、いよいよ劉備の所在を知り曹操のもとを辞去しようとしたので、これを引き留める手だてを相談している場面である。ここでも、知恵者の張遼が、力自慢の許褚に関羽を取り押さえさせるよう献策している。

「百計張遼」と「九牛許褚」という定型句で二人を併称することが、元代に既に確立していたのかどうかは確認しがたいのであるが、この平話の例を見れば、元代に既に二人が知恵者と力自慢と見なされていたことは明らかである。また、元曲の明代のテキストに繰り返し「百計張遼」と「九牛許褚」と言う定型句が使用されていることから、明代の人々も、この二人の設定を当然のこととして受け入れていたことは間違いがない。

IV 敵将から友人へ

a 書き換え

「百計張遼」あるいは「智囊先生張遼」と呼ばれている平話や元曲の張遼は、単に知将というよりは、むしろ敵役であり、『三国志演義』でいえば司馬仲達のように手強い敵として描かれている。これは、関羽の友人という『三国志演義』における張遼像とは対立するものである。このため、『三国志演義』では、平話や元曲と同じ話を採用していながら内容は全く書き換えてしまうことがある。

大きな書き換えは、劉備とはぐれてしまい孤立した関羽に、張遼が曹操側の使者となって投降をすすめる場面と、曹操のもとを立ち去ろうとする関羽に「錦袍」を送ってはなむけにしようと言う場面である。この両場面とも平話の張遼はその智恵によって関羽を曹操側に引き寄せようとするのであるが、『三国志演義』では、友人として対面している。

後者の平話の場面は、例 10 として既に引用した。元曲の「関雲長千里独行」(6-726) にもこの場面は、みえるが、これも次のように平話と同じく張遼が関羽を「智取」する計略を献策したことになる。

- 11 (張遼云)丞相、咱不可与他交鋒。想雲長在十万軍中、刺了顔良、誅了文醜、俺如今領兵与他交戰、丞相也枉則損兵折將。(曹末云)似此、怎生擒的雲長。(張遼云)丞相、俺如今則可智取。(曹末云)你有何智量。(張遼云)我有三条妙計。丞相領兵趕上雲長、則推与他送行。丞相若見雲長、丞相先下馬、関雲長見丞相下馬、他必然也下馬來。若是雲長下馬來、叫許褚上前抱住雲長、著衆將下手。第二計、丞相与雲長遞一杯酒、酒裏面下上毒

葉。第三計、丞相把那西川錦征袍、蓄許褚托在盤中。丞相贈与雲長。雲長見了、必然下馬來穿這袍。可叫許褚向前抱住、衆將下手。恁的方可擒の雲長。

一方『三国志演義』(6,15b-17b)は、例12のようになっており、そもそも曹操に引き留める気がなく、張遼は関羽を引き留めに向かうだけで、「智取」の献策はない。

- 12 曹操叱退蔡陽、不肯教去。程昱曰、「関某不辭丞相、不奉鈞命、何如。」操曰、「使歸故主、以全其義。」昱曰、「丞相雖能捨之、諸將皆不平也。」(中略)程昱曰、「久後為禍、丞相休悔。」操曰、「雲長非負義之人也。彼各為主、豈容人情耶。想雲長此去不遠、吾一發結識他、做箇大人情。先教張遼去請住他、我与他送行、將一盤金銀為路費、一領錦袍作秋衣、教他時時想我。」程昱曰、「雲長必不回來。」操曰、「吾引數十騎去、使張遼單騎先去請。」(中略)忽聽有人叫、「雲長且慢行。」関公自思想、「呼我字者、必不是害吾之人。」遂教車仗從人只管大路緊行、「吾自理會。」回頭視之、見張遼拍馬而至。関公持青竜刀、勒住赤兔馬、問曰、「文遠莫非來擒我乎。」遼曰、「吾身無片甲、手無軍器、何必生疑。丞相知兄遠行、特來相送、並無傷害之心。」公曰、「丞相此來、必有他意。」遼曰、「丞相已言『彼各為主、勿追也』、容兄自去、以全其義。為不曾相送、自輕身而來也、特令小弟先來請住兄長。」

引用箇所にも、敵役はいる。程昱は、長くなるので途中省略したが、関羽を見逃そうとする曹操に何回もくいさがって反論する。しかし曹操と張遼は関羽に好意的な人物として描かれている。特に張遼は、関羽の置かれた状況に配慮し、甲冑を身につけず、武器も持たずに彼を追いかける。曹操も劉備のもとに去ってゆく関羽の行動を許し追っ手を差し向けるべきと言う主張を退けたばかりか、立ち去ってゆくようにする彼に、もっとよく知り合いになれるように大いにはなむけをしようと考える。この張遼と曹操の行動は、後の華容道での関羽の行動と呼応するように描き直されたと思われる。

b 削除

平話の張遼は、敵役として登場するので、『三国志演義』のように関羽の友人として描こうとすると、内容の書き換えだけではうまく処理しきれず、平話にあった話を削除したり、あるいは逆に平話にはない話を追加して、友人にふさわしくした手直しをする必要も生じている。

最も大きな削除としては、関羽の死と張遼の関係をあげることができる。平話の張遼は、関羽を死に迫いやった張本人である。次の引用は、平話における于禁が関羽の水攻めで破れたあとをうけての、関羽の死までの記述である(68ab)。

- 13 操拜四将為元帥。宰相賈翊、第二張遼、第三夏侯惇、第四太尉李典。更有数員名将、起十大大軍到荊州。張遼献計、可接搆江吳、兩夾間攻、荊州可破。」張遼過江見吳王、美言說孫權曰、「吳地名將呂蒙、將百員將、十萬軍至荊。東南吳地呂蒙、西北魏軍賈翊。」

関公得知。関平告曰、「我父年邁、遂發文字去益州成都府見漢中王、軍師、來使賊軍不動自解。」関公言曰、「家兄引衆官圍川、無我等之功。今日荊州賊軍侵界、便去取救軍、不為大丈夫也。」

数日、関公出城東南、迎呂蒙、張遼、後殺西北、迎魏軍。呂蒙後襲。前後半月、賊軍不散。関公金瘡發。関平告曰、「荊王使人去赴西川求救。」到葭萌関、被劉封・孟達納殺文字、前後一月、求救文字三番、皆被劉封納殺不申。

関公金瘡稍斂、來日準備出戰。当夜三更、大風忽作、其響若雷、滿城人若骨折了関公。出戰、兩國夾攻。関公在荊州東南、困於山嶺。落後数日、大雨降。後說吳・魏兩國官員至荊州、言聖歸天。巧說分了荊州。有張遼、長安說与曹公、曹公大喜無限。

ここに登場する張遼は、敵役として関羽を死へと追い詰めてゆく。関羽の死は、張遼が曹操に呉との挟撃の計を献策したことにはじまる。その計略実現のために自ら呉に赴いて説得し、呉の呂蒙とともに関羽を追い詰め、関羽の死を曹操に報告したところでこの話は終わる。ここでの張遼は知将であることによって、関羽に死をもたらした人物である。

張遼を関羽の友人として描こうとする『三国志演義』にとり、このような話はふさわしくない。そこで『三国志演義』では張遼が関羽と関わる場面は、華容道での対面という二人の友情を印象深いエピソードで締めくくり、関羽の死にまつわる話から張遼の名を削除してしまっている。『三国志演義』の例13に対応する箇所を見ると、呂蒙の攻撃、劉封等の裏切りから関羽の死へと向かう展開は平話と大差がない。ただ張遼は全く姿を含まない。于禁が水攻めで破れたあと魏は、呉と連携して関羽に対抗しようとするが、その献策をするのは『三国志演義』後半に孔明のライバルとして活躍する司馬仲達である。また関羽を攻撃する魏の將軍は徐晃であって、いずれにも張遼は関わっていない。

V 「忠」の人と「義」の人

『三国志演義』は、関羽と張遼の関係を、平話や元曲のような敵将から、友人に変更したばかりでなく、彼の人物像を知将から「忠義」の人に変更もしている。

このように人物像の変更をするにあたり、『三国志演義』は、張遼が曹操配下となる以前の箇所にも二つの話を追加している。一つ目の追加は、張遼が呂布の將軍として、沛城を攻撃し、関羽と対戦する場面である(4,50b-51a)。ここで関羽は、初対面であるにもかかわらず張遼が「此人有忠義之氣」と知り、積極的に戦わないだけでなく、張飛が張遼を迫撃しようとするのも引き留め、張飛には「張遼武芸不在你我之下、是吾夜來美言説之、其人頗歸順之心。今日不欲与汝廝殺。」と説明している。次の追加は、張遼が呂布とともに曹操にとらえられた場面にある。ここでは、張遼が処刑されそうになったところに関羽が登場し、「関某素知文遠忠義之士、吾以性命保之。」(4,60b)と言って助命を願い出ている。

『三国志演義』が追加したこの二箇所は、関羽と張遼がどのような経緯で友人となったのかを説明するもので、二人の友情を示す一連の話の導入部の役割を果たしている。このように導入部において「忠義」という言葉を提示したのは、その後の関羽と張遼の関係が、「忠」と「義」の問題となることを予告するものである。確かに関羽と張遼は友人であるが、敵味方に分かれていることがほとんどなので、両者の利害は対立し、一方にとって望ましい状況の時、他方にとってそれは望ましくない状況とならざるをえない。主君に「忠」であろうとすると、友情（「義」）を捨てねばならず、友情をとれば主君に不忠となってしまう。

関羽の「忠」と「義」の葛藤を扱ったのは華容道であった。関羽はなによりも「義」を重んずる人間である故に（「雲長是個義重如山之人」）、華容道において苦悩しながらも曹操と張遼を逃がしてしまったのである。

一方張遼にも「忠」と「義」の間で選択に悩む場面が用意されている。関羽が劉備とはぐれ、曹操のもとに身を寄せていた時、関羽の人物を高く評価する曹操は、何とか彼を自分の配下に招きたいと考え、張遼に関羽の本心を探らせる。しかし関羽の答えは「吾知曹公待我甚厚。奈吾受劉將軍恩厚、誓以共死。不可背之。吾終不留此」であった。張遼は、関羽の考えを正直に言えば、彼の身が危ないかもしれないが、言わないのは人に仕える道ではないと悩み、結局

関羽とは逆に、次のように主君に対する「忠」を優先させる (5,60b-61b)。

14 遼自思曰、「若以実告曹公、恐傷雲長性命。若不実告、又恐非事君之道。」

喟然嘆曰、「曹公、君父也。雲長、弟兄也。以兄弟之情而瞞君父、此不忠也。寧居不義、不要不忠。」遂入室以実告。操曰、「雲長欲与劉備生死同处、必不留也。」操嘆曰、「事主不忘其本、此天下之義士也。此人何時可去。」

遼曰、「彼言必欲立功、以報丞相方去。」操又嘆曰、「仁者之人也。」

この箇所は、『三国志』⁽⁹⁾「関羽伝」注が引用する次の傳子の文章を利用している (p.940)。

15 遼欲白太祖、恐太祖殺羽、不白、非事君之道、乃歎曰。「公、君父也。羽、兄弟耳。」遂白之。太祖曰。「事君不忘其本、天下義士也。度何時能去。」

遼曰。「羽受公恩、必立効報公而後去也。」

『三国志演義』の張遼が、曹操を「君父」、関羽を「弟兄」(『三国志』では「兄弟」)としたところまでは『三国志』の踏襲である。しかしこれを「以兄弟之情而瞞君父、此不忠也。寧居不義、不要不忠」と「忠」と「義」の問題ととらえなおしたのは『三国志演義』の解釈であり、『三国志演義』が主君と友人の関係を、「忠」と「義」の問題ととらえていたことはここからも明らかである。

以上みてきたように、『三国志演義』の作者は、平話や元曲では敵役に過ぎなかった張遼を、関羽の友人とし生まれ変わらせた。二人は、友人であり続けることの難しい状況におかれている人物である。それをあえて友人とし、華容道に至るまでの、長い道のりにおける二人の行動を通して、「忠」の人と「義」の人を巧みに造型して見せたところこそ、作者の最大の工夫であり、またそれは十分に成功したと言えるであろう。

注

(1) 『魯迅全集』巻9 (人民文学出版社 2005)、p.136。

(2) 嘉靖本のテキストは、『三国志通俗演義』(新文豊出版公司 1979)を使用する。

この外に、『三国志通俗演義史伝』(関西大学出版社 1998、『史伝』と略称する)、と毛宗崗本系統の本文として『三国志演義』(中華書局 1995、毛本と略称する)を参照し、必要に応じて異同を指摘する。

(3) 「当時曹操引這件事、説猶未了」の2句は前後と意味が通じない。「史伝」は「当時曹操引這件事來說雲長」(5,14b)となっているが、それでも意味が通じない。毛本は、この2句を適切でないと考えらしく、削除して、曹操の台詞の後すぐに「雲長是個義重如山之人」と続けている。

この箇所の意味が通じない原因は、「当時」にある。これを「すぐに」と解釈できないし、「そのとき」と解釈しても、曹操の台詞は今この場で発せられているのでつじつまが合わない。

このように引用の箇所を叙述の文章と考える限り、「当時」が何を指すのかはつきりしないのであるが、これを説明の文章とみれば、「この時曹操は」という意味になり解釈可能になる。

嘉靖本では「低首良久不語」と「当時曹操引這件事」の間に、曹操の台詞中にあった「庾公之斯迫子濯孺子之事」を説明する文章が割り注になって挿入されている（「史伝」は割り注ではなく、字下げ扱い）。

昔日春秋之時、鄭國有一賢大夫、名子濯孺子。深精弓矢之芸。（中略）于是子濯孺子得命而還鄭。天下稱義。出『孟子』。

この割り注の文章と「当時」以下の2句を一続きのものとして読むとかなりわかりやすくなる。嘉靖本の「当時曹操引這件事」では、つながりが悪いが、「史伝」の「当時曹操引這件事來說雲長」であれば、この説明を受けて『春秋』にこのような話があるので、この時曹操は……」と問題なく続けて読むことができ、この割り注の文章と「当時」以下の2句が本来一続きのものであり、「当時」の箇所は、『史伝』の「当時曹操引這件事來說雲長」が本来のものと思われる。

なおこの箇所の割り注の文章は、最後に「出『孟子』」とあるが、引用されている文章は、『孟子』そのままではなく、一部口語化されているので、この箇所は「出孟子」のみが注で、その他は全ては本文であったものが、説明の長さからある時期に、本文から外された可能性もあると思われる。

嘉靖本が、なぜ「当時曹操引這件事、說猶未了」となっているのかについては、二つの説明が可能であるように思われる。一つは嘉靖本が依拠したテキストの段階で既にこの箇所は本文と注に分断されており、意味がとりにくくなっていたのを改正するつもりでかえっておかしな文にしてしまったと言うことが考えられる。もう一つは「雲長聞之、低首良久不語。当時曹操引這件事」と「說猶未了」を差し替えて、この箇所を次のように改定するつもりであったと言う可能性である。

操曰、「五関斬将之時、還能記否。（中略）豈不知庾公之斯迫子濯孺子之事乎。」

說猶未了、雲長是個義重如山之人、又見曹君惶惶皆欲垂。雲長思起五関斬将放他之恩、如何不動心。

このようにすると、曹操の話聞き終わらぬうちから、何よりも義を重んずる関羽は、心が動きとなり意味が通じる。もしそうであれば、この箇所は、削除するつもりだった「雲長聞之、低首良久不語。当時曹操引這件事」を不注意から残してし

まい、差し替えるつもりだった「説猶未了」と併存させてしまったために、一層おかしい文章となってしまったと考えられる。

- (4) 「史伝」(5,14b)は「曹君」を「曹軍」としている。嘉靖本も引用箇所より前に「操軍」とあり、「曹君」は、「曹軍」の誤りであろう。毛本のこの箇所も「曹軍」である。
- (5) 嘉靖本には、張遼がなぜ遅れたのか十分な説明がない。華容道直前の張遼に関する記述は「操恐後軍来赶、令張遼・許褚・徐晃引百騎執刀在手、但遲慢者斬之」(10,60b)である。これだと張遼は、許褚・徐晃とともに行動しているはずで、張遼が遅れてくるなら他の二人も遅れてくるはずである。この箇所、毛本(p.565)は嘉靖本と同文であるが、『史伝』は「操恐後軍赶来、差張遼断後、許褚・徐晃二人引百余騎执刀在手、但遲慢者斬之」(5,13a)である。『史伝』が華容道と矛盾しないようにこの箇所を書き換えたのか、嘉靖本が文章を整理しようとして、後の場面とのつながりを失念したのか、どちらとも決めがたいが、文章としては『史伝』のほうが合理的である。
- (6) テキストは、陳翔華編校『元刻講史平話集』(北京図書館出版社1999)第5冊。
- (7) 元曲のテキストは、王季思主編『全元戲曲』(人民文学出版社1990-99)を使用し、巻数、頁数を1-74のように表記する。
- (8) 『脈望館抄本古今雜劇』本(6-11)は、次のように若干文字が異なる。
怕甚麼曹孟德下張遼的這許褚
- (9) テキストは、『三国志』(中華書局 1959)、『三国志演義』の作者は、「関羽伝」注の、この文章から、張遼を関羽の友人とすることを着想したのではないかと思われる。

(筑波大学)